

給へる折伏の第一義である。

幸なる哉生等末法に生れ師に値遇し奉る事は出来ざるも色香美味の大良藥を服する事を得るとは何たる有り難い事であらう、宗祖は

幸と我等末法に生れて一步をあゆまずして三祇を超へ、頭を虎に飼はずして無見頂相をわん云云

(撰時抄)

と仰せになつて居る、何時の代にかは此の山よりも高く海よりも深き大恩を報ずる事が出来るであらうか、九牛の一毛だにも報ず可く勉め勵まずして居る可きであらうか。

宗教と實生活

小林 貞宣

時勢の進歩發達に伴ひ、社會は益々複雑を極め、或は生活難、或は就職難等の悲鳴は、其度を高めて來た。是に應ずべく、種々なる救濟事業を要求するに至つた。近時養育院、孤兒院等の慈善事業の増大しつゝある事は、最も注目に價すべきである。吾人は斯

の如き諸事業が、如何に現代の時運に、適切なる効果を與へ居るかを、承認せざるを得ない。此等諸種の社會政策は、政府や、自治團體に於て、盛んに振起されて居る。且各宗の布教團體に於て、極力努力されて居る。此の複雑たる生活を救濟すべきものは所謂眞の宗教、眞の信仰より外に何物もない。しかしながら吾人は、彼等他宗他門の如き、消極的な社會救濟を離れて、意味あり根底ある、慈善事業を施すべきである。現今の養育院、孤兒院等の、目的とするものは即生活難を救ひ、貧民を憐恤するを以て目的とす。餓に泣くものに食を與へ、病に苦しむものに藥を施す等、これ等を以て目的とす。而るに吾人は之のみにて満足することはできない。唯食を與へ藥を施す等は、一時的の救濟にして、永遠の慰安、悠久なる生命を保つ事は不可である。

抑も物質的に人を救ふが如きは、自他を分別せざる所の、禪や基督の説く所である。

彼の歐洲の原野に於て現今盛んに砲火を交へ、肉を削り、血を流し、つゝある其悲惨なる状態は、實に言語に絶し、吾人の戰慄すべきところである。